

東亜同文書院編『北京官話教科書』について－初探

塩山正純

Analysing the Characteristics of the Mandarin Dialect in Toa Dobun Shoin's *Pekin Mandarin Textbook*.

SHIOYAMA Masazumi

The *Pekin Mandarin Textbook* (北京官話教科書) was compiled and published by *Toa Dobun Shoin* college, a Japanese institution of higher education in prewar Shanghai, and was used in the college's Chinese language education. The textbook was published in 1910. In 1916, *Toa Dobun Shoin* published the first edition of *Huayu Cuibian* (華語萃編), a collection of Chinese textbooks for the first grade of *Toa Dobun Shoin*. This work was "compiled as a textbook for the first grade of *Toa Dobun Shoin* of Pekin Mandarin Languages" and was used for many years thereafter. It is believed that the *Pekin Mandarin Textbook* was the basis of the *Huayu Cuibian*, which used the first volume of the *Pekin Mandarin Textbook* as its source material. It then presents a rudimentary discussion of the characteristics of Pekin Mandarin as learned from this textbook by students of *Toa Dobun Shoin*. An overview of the lexical features of this textbook shows that it corresponds to six of the seven characteristics of Pekin Mandarin, as described by Ota (1969). Many other words characteristic of Pekin Mandarin or Northern dialects can also be found in this *Textbook*.

キーワード：東亜同文書院 (The Tung Wen College (Toua Doubun Shoin))、官話 (Mandarin)、中国語 (Chinese Language)、戦前日本の中国語教育 (Chinese Language Education in Pre-War Japan)

1 『華語萃編』成立までのプロセスにおける『北京官話教科書』

書院の初年次用中国語教科書の集大成である『華語萃編』の1916（大正5）年の初版出版までのプロセスは、石田（2019）等によると、御幡雅文の『華語跬歩』「明治丙戌」即ち1886年の未定稿版（関西大学鱒澤文庫本）に始まる。その後、『華語跬歩』は1890年或いは翌年に日清貿易商会蔵版、書院開校の1901年には柏原文太郎編輯版、1903年からは文求堂書局が市販もした版本が刊行され、1908年以降はその増補版が版を重ねた。また、1905年に高橋正二の『北京官話音声譜』、小路真平と茂木一郎の『北京官話常言用例』も刊行され、『華語萃編』出版のわずか6年前の1910年には『北京官話教科書』（以下『教科書』と略称）が出版された。1901年の書院開校から1916年に『華語萃編』が出版されるまでの間、石田（2019）によれば、『華語跬歩』『北京官話音声譜』そして『教科書』等が教材として活用された¹⁾。

『教科書』は、上述の通り1910年の出版であるが、同書の朱蔭成による序文末尾に「庚戌夏月」（1910年、明治43年にあたる）、凡例に「明治四十三年六月三十日」と記されており、さらに石田（2019）も引用する東亜同文書院滬友同窓会『東亜同文書院同窓』5号（1910年）の広告に「初版六月發行 再版目下印刷中」とあることから²⁾、明治43年つまり1910年6月に初版が発行されたことが分かる。同広告には『教科書』が「上海書院三教授及三清國講師連ノ原ト東亜同文書院用教科書ニ充フル為メ」に編纂されたことが記されている³⁾。『教科書』冒頭には9項目からなる凡例があり、第1項はこう記している。

清國語學書ノ世ニ行ハル、モノ甚タ多シト雖、未タ教科書ニ編著セラレタルモノアルヲ見ス、從來ノ著書中、參考書トシテ貴フヘキ價値アルモノハ其著ニ乏シカラス、然ルニ各一長一短アリテモ完全ト稱ス可キモノナク、編者ノ常ニ以テ遺憾トナス所ナリ、昨夏我東亜同文書院ニ於テ語學書編纂ノ議アリ、余等其編纂ヲ囑セラル、而シテ余等淺學薄識固ヨリ此大任ヲ荷フノ力ナク、加フルニ日々教授ノ餘暇ヲ以テ其事ニ從フノ止ムヲ得サルカ故ニ百事意ノ如クナル能ハス、茲ニ一年ノ歲月ヲ費シテ僅ニ第一卷ノ編纂ヲ了セリ、而シテ自身尚且完全ト信スルノ勇ナシ、然レトモ他書ニ比シ稍教科書ノ體裁ヲ具備スルモノタ

1) 『華語萃編』出版に至るプロセスについては石田（2019）が最も詳細に述べている。同書出版後の書院の中国語教育については、今泉潤太郎（2007）「『華語萃編』から見た同文書院の中国語教学」、松田かの子（2001）「官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察」、石田卓生（2010）「東亜同文書院の中国語教育について」、同（2017）「戦前日本の中国語教育と東亜同文書院大学」等がある。

2) 石田（2019）381、400頁。東亜同文書院滬友同窓会『東亜同文書院同窓』は東京大学大学院法学政治学研究所附属近代日本法政資料センターに部分的に所蔵がある。

3) 三教授は本書凡例によると青木喬、大原信、松永千秋の三名、三清國講師は序文を書いた朱蔭成ほか三名で、朱蔭成は『華語萃編』初集においても主要執筆陣の一人である。

ルコトハ信シテ疑ハサルナリ、大方ノ君子幸ニ大教ヲ賜ヒ大成ニ至ラシメハ、是編者ノ光榮トスル所ナリ

ここから、『教科書』以前に中国語学習書において専ら教科書として編集されたものが無く、その編纂が急務であり、編者らが一年をかけて第一巻を編んだことが分かる。

2 『北京官話教科書』巻一の構成

後続教科書の『華語萃編』初集は、巻頭に音節一覧としての「華語音譜」、全音節の声調練習としての「華語聲音編」を置くが、『教科書』は特に発音編を別置していない。『東亜同文書院同窓』5号(1910年)の広告が第2項「語中一字ニシテ異リタル聲音ヲ有スル文字ニハ盡ク註釋ヲ加ヘテ其異同ヲ辯ジ」、第3項「即チ第一第二編ニ於テ毎課新學十五乃至十六ニ編入シ之ニ聲音ノ符號ヲ附シ以テ記論ニ便ナラシメ」と述べるように、第一編からの本文編の各課本文の前に新出漢字を置き、本文末尾に必要に応じて多音字等の解説を加えている。例えば、第三課の新出漢字で“麼(広)音摸”と“麼(広)(嗎)音媽”とするように、同じ字でも発音毎に別に見出し語を立て、異体字は括弧書きで記している。第一編第一課では“注意 凡上聲兩字相聯者、上一字總作下平、例如五百之五、讀下平、餘仿此例惟兩同字相聯、亦間有不然者、如姐姐、癢癢等、皆第一字讀上聲、第二字讀上平、此類甚少、”のように、第三声連続の変調を説明し、同第二課の“這 俗音 之黑切去聲 義同、唯於北京使用、即土音也、”は“這”字の方言音を解説している。

また、『華語萃編』初集は、第一編(第一課「聞一知十」、第二～七課「散語問答」、第八～廿二課の会話文)、第二編(第一～十六課の会話文)、第三編(第一～廿二課の会話文)で構成され、巻末に附録の「名詞集」を置くが、『教科書』は大枠の構成が『華語萃編』と完全に一致する。但し、各課の会話本文では、『華語萃編』は話者を明記するが、『教科書』は、単語、フレーズ、会話文全てを前から順にナンバリングしており、特に話者を明記しない。

第一編「単語 散語」の全40課をタイトルに基づいて分類すると、「家常用語」つまり日常用語が30課75%を占め、その他数字の表現を説明する「數目」が1課、「飲食用語」が2課、食器と関連するフレーズ「器皿用語」が1課、時間表現の「時令用語」が2課(第22課落丁により不明)、「滋味瑣譚」が1課(第24課落丁により不明)、「倫常用語」が1課(第25課散語前半まで落丁)、「學務瑣譚」が1課(第27課散語前半まで落丁)、応対つまり問いかけに対する受け答えの表現の「應對用語」が1課である。いずれの課も個別具体のテーマ設定はなく、汎用性のある極めて基本的な表現が羅列されている。

第二編「散語 問答」の全50課は、第1課から第20課までは、奇数課で個別具体のタイトル10

第一編各課3項目の数量（新出漢字：文字数、単語散語：用例数、発音説明：項目数）

課	新出漢字	単語散語	発音説明	課	新出漢字	単語散語	発音説明
1	15	15	10	21	15	*	*
2	15	17	4	22	*	*	*
3	16	25	7	23	*	*	*
4	16	16	6	24	*	*	*
5	15	23	7	25	*	*	2
6	15	20	5	26	15	27	*
7	16	24	4	27	*	*	3
8	15	22	8	28	16	28	7
9	15	20	1	29	17	22	1
10	15	19	0	30	*	*	*
11	15	20	2	31	*	32	3
12	15	21	1	32	17	31	5
13	16	23	6	33	17	29	0
14	15	22	8	34	16	25	6
15	15	27	6	35	16	25	2
16	15	28	2	36	16	26	2
17	16	18	2	37	17	24	0
18	15	24	1	38	16	23	7
19	15	23	4	39	15	25	2
20	16	17	2	40	17	21	3
				合計	516	762	129
				平均	15.6	23.1	3.8

「*」印は落丁により全体の数字を示せない箇所であることを示す。

種、偶数課で「家常用語」の交互配置の構成である。第21課から第32課までは、個別具体のタイトル3課と日常用語の「家常用語」1課の配置が3回続く構成である。第33課以降の18課の構成は特徴的で、個別具体のタイトルではなく様々な派生義で常用される3種の動詞“打”、“弄”、“上”の習得に特化して「～字用法」と第する課が複数あり（「打字用法」：第34、36、37、38課、「弄字用法」：第42、43、44、45課、「上字用法」：第48、50課）、個別具体のタイトルが6課、「家常用語」は2課のみの配置である。第二編で、「家常用語」と“打”、“弄”、“上”の3つの動詞に関する課を除く、個別具体のタイトルは以下の通りである。

第1課 遊學滬濱	第3課 投信託人	第5課 送肉退換	第7課 飭僕治饌
第9課 家僕侍主	第11課 約友會食	第13課 託買綢緞	第15課 互談風俗
第17課 閒談詩文	第19課 故郷秋景	第21課 輿談書院	第22課 時事瑣譚
第23課 拜年受苦	第25課 寫信託寄	第26課 風俗瑣譚	第27課 訓僕有法
第29課 囑工製衣	第30課 地震可怕	第31課 叫貨受損	第33課 新知如舊
第35課 代友詢貨	第39課 歸京訪友	第41課 害人遭報	第47課 京都鋪戶
第49課 脚行生意			

第三編「問答 談論」の40課は全てに個別具体のタイトルがあり、第1課から第30課までは、奇数課が問答即ち会話、偶数課は談論即ち短文の交互構成であるが、問答と談論のテーマに必ずしも関連性はない。第31課から第40課は全て問答即ち会話である。

【問答】 会話

第1課 求伴購物	第3課 承擾道謝	第5課 應酬新知	第7課 託友借款
第9課 用人不謹	第11課 雇船晉京	第13課 初次相會	第15課 久別相會
第17課 託友匯兌	第19課 訪友未遇	第21課 介紹兩友	第23課 替友致意
第25課 眞能用人	第27課 邀請西席	第29課 雇工造房	第31課 歸京訪友其一
第32課 歸京訪友其二	第33課 三訪初會	第34課 回拜新友	第35課 擴充生意
第36課 互談近況	第37課 謀決去就其一	第38課 謀決去就其二	第39課 詳訴近況
第40課 詳訴近況			

【談論】 短文

第2課 擺攤多詭	第4課 婉避惡友	第6課 放砲迸眼	第8課 貪得無厭
第10課 重財輕身	第12課 別開生面	第14課 西山避暑	第16課 忍耐成功
第18課 看銀有法	第20課 從小往大	第22課 看人討賬	第24課 行客留神
第26課 忍耐為要	第28課 行路留心	第30課 立志應堅	

3 名詞集の増補からみる『華語跬步』、『教科書』、『華語萃編』の継承関係

『華語跬步』の各版は、「天文類」以下の名詞集に該当する部分について、版を重ねる過程で語彙の増補が見られるが一貫して巻の冒頭に配置している。『教科書』、『華語萃編』は課文に該当する第一編から第三編に続く附録として配置し、『華語跬步』から『教科書』、『教科書』から『華語萃編』へ、それぞれ項目数の増補が見られる。『華語跬步』未定稿版、『教科書』、『華語萃編』の名詞集に該当する項目と頁数は以下の通りである。

『華語跬步』未定稿版（全11項目、19頁）

天文類、地輿類附房屋類、時令類、身體類、飲食類、器用類附衣冠類、鋪店類、稱呼類附人物類

『教科書』(全15項目、44頁)

天文時令類、地輿類、倫常眷属類、稱呼類、身體類、房屋類、鋪店類、傢俱類、衣冠首飾類、珠寶類、飲食類、疾病類、藥材類、草木類、禽獸昆蟲類

『華語萃編』初版(全24項目、96頁)

天文時令類、地輿類、人倫類、稱呼類、身體類、衣履首飾類、房屋鋪店類、傢俱類、飲食類、疾病類、藥材類、冠婚喪祭類、武備類、書籍文牘類、商賈財帛類、車船行旅類、礦物寶石類、樂器玩具類、禽獸昆虫類、草木花卉類、顔色類、度量衡數量類、字部類

『華語跬歩』未定稿版は11項目であるが、『教科書』は項目の分割、改称はあるが、基本的には全てを継承した上で、疾病類、藥材類、草木類、禽獸昆蟲類の計4項目を追加して全15項目となった。『華語萃編』は項目の改称はあるが『教科書』の全15項目を継承して、さらに冠婚喪祭類、武備類、書籍文牘類、商賈財帛類、車船行旅類、顔色類、度量衡數量類、字部類の9項目を追加して全24種類となった。『華語跬歩』に並んだ項目は基本的に『教科書』、『華語萃編』でも温存されていることから、各項目は時代の変化に関わらず必要とされる内容であったと考えられる。そして、時代とともに必要とされる分野が増して最終的に『華語萃編』では当初より13項目追加された全24項目となったのである。

では、具体的な項目において、収録語彙にどのような増補があったのかを『教科書』地輿類と、これに該当する『華語跬歩』未定稿版の地輿類附房屋類、『華語萃編』地輿類とあわせて見てみよう。

『華語跬歩』未定稿版 地輿類附房屋類

滿洲、蒙古、中國、東三省、盛京、吉林、黑龍江、十八省、直隸、江蘇、安徽、江西、浙江、福建、湖北、湖南、河南、山東、山西、陝西、甘肅、四川、廣東、廣西、雲南、貴州、海口、馬頭、上海、鎮江、寧波、九江、漢口、天津、牛莊、芝罘、廣州、汕頭、瓊州、福州、厦門、臺灣、淡水、山、河、湖、海、泰山、華山、衡山、恒山、嵩山、鴨綠江、遼河、灤河、白河、運河、黃河、楊子江、洞庭湖、高郵湖、洪澤湖、太湖、寶應湖、鄱陽湖、渤海、黃海、山峰、山嶺兒、山坡子、山澗子、山窪子、切坡子、高坡子、土坡兒、山底下、河套子、河岔子、河沿兒、護城河、死溝、水坑、漩窩、大道、三岔路、岔道、石頭道、拐彎兒、大街、小巷、大胡同兒、小胡同兒、死胡同兒、樹林子、墳地、鄉下、屯裏、大鎮店、小鎮店、小村兒、村莊、水源、一道橋、擺渡、水路、旱路、對岸、河岸、海岸、撥船、煤窰、金礦、銀礦、窪地、關外、口外、京城、城門、城牆、皇宮、禁地、衙門、軍營、廟、和尚廟、喇嘛廟、道士廟、教場、砲台、帳房、學房、鋪面房、住房、舖子、房子、院子、大門、後門、影壁、門房、正房、廂房、馬棚、茅廁、毛房、廚房、窓戶、榻扇、炕、台階

兒、山墻、米倉、銀庫、寶塔

この『華語跬歩』未定稿版の地輿類附房屋類では、全154語のうち、アミカケ部分の房屋類の25語を除く129語が地輿類の収録語彙とみなせる。『教科書』地輿類はここから「臺灣、淡水、山、河、湖、海、洪澤湖、黃海、切坡子、河套子、水坑、拐彎兒、旱路、海岸、撥船、窪地、關外、口外、京城、城門、城墻、皇宮、禁地、衙門、軍營、廟、和尚廟、喇嘛廟、道士廟、教場、砲台」を除く語彙を継承し（但し、『華語萃編』は「山、河、湖、海、洪澤湖、黃海、旱路、海岸、窪地」を再録）、語彙を大幅に増補して以下の通り266見出し語となった（アミカケ部分は『華語跬歩』未定稿版から継承した語彙）。

『教科書』地輿類

甲第一字重念

1 世界、2 英國（英吉利）、3 法國（法蘭西）、4 德國（德意志）（日耳曼）（普國）（布國）（普魯士）、5 美國（米利堅）（花旗國）（合眾國）、6 俄國（俄羅斯）、7 日本（東洋）、8 清國（中國）、9 奧國（奧地利亞）、10 意國（義國）（意大利亞）、11 日國（西班牙）（日斯巴尼亞）（大呂宋）、12 葡國（葡萄牙）、13 噠國（丹國）（丹麥）、14 瑞國（瑞典）、15 璠國（那國）（那威）、16 比國（比利時）、17 荷國（和蘭）（荷蘭）、18 土國（土耳其）、19 希臘、20 印度、21 朝鮮（高麗）、22 暹羅、23 波斯、24 緬甸、25 秘國（秘魯）、26 巴國（巴西）、27 埃及、28 布哇、29 小呂宋、30 滿洲、31 蒙古、32 青海、33 盛京、34 吉林、35 直隸、36 山東、37 山西、38 河南、39 江蘇、40 安徽、41 江西、42 福建、43 浙江、44 湖北、45 湖南、46 陝西、47 甘肅、48 新疆、49 四川、50 廣東、51 廣西、52 雲南、53 貴州、54 奉天、55 保定、56 濟南、57 太原、58 開封、59 蘇州、60 安慶、61 南昌、62 福州、63 杭州、64 武昌、65 長沙、66 西安、67 蘭州、68 伊犁、69 成都、70 廣州、71 桂林、72 貴陽、73 北京、74 順天、75 瀋陽、76 南京、77 江甯、78 大連、79 牛莊、80 營口、81 遼陽、82 新民府、83 鐵嶺、84 長春、85 三姓、86 琿春、87 愛暉、88 天津、89 大沽、90 芝罘（煙台）、91 膠州（青島）、92 濰縣、93 上海、94 吳淞、95 鎮江、96 蕪湖、97 九江、98 湖口、99 漢口、100 沙市、101 宜昌、102 岳州、103 湘潭、104 常德、105 重慶、106 萬縣、107 寧波、108 溫州、109 廈門、110 九龍、111 拱北、112 江門、113 甘竹、114 三水、115 惠州、116 北海、117 瓊州、118 梧州、119 南寧、120 龍州、121 蒙自、122 河口、123 思茅、124 騰越、125 庫倫、126 泰山、127 華山、128 衡山、129 嵩山、130 恒山、131 太湖、132 灤河、133 遼河、134 白河、135 黃河、136 運河、137 長江、138 甌江、139 閩江、140 汀江、141 珠江、142 海道、143 旱地、144 山洞、145 山崩、146 口岸、147 京都、148 城池、149 鎮店、150 旱田、151 水田、152 山地、153 野地、154 草地、155 墳地（坎地）、156 沙漠、157 渤海、158 岔道、159 道路、160 馬

路、161 村莊兒、162 碼頭、163 擺渡、164 莊稼地、165 鄉下、166 屯裡、167 水路、168 瀑布、169 溫泉、170 火山、171 池子

乙第二字重念

1 地球、2 大洋、3 海口、4 西藏、5 商埠、6 通江子、7 海拉爾、8 汕頭、9 亞東、10 山峰、11 山嶺兒、12 山坡子、13 山澗、14 山窪子、15 山上頭、16 山底下、17 礦窖、18 金礦、19 銀礦、20 銅礦、21 煤窯、22 陡坡子、23 高坡子、24 土坡兒、25 水源、26 河岔子、27 河沿兒、28 河岸、29 對岸、30 水坑、31 死溝、32 樹林子、33 大道、34 大街、35 小巷、36 小村兒、37 地震（地動）、38 漩窩、39 海嘯

丙第三字重念

1 五大洲、2 亞細亞、3 歐羅巴、4 阿富汗、5 阿剌伯、6 墨西哥、7 尼加拉瓜、8 摩洛哥、9 舊金山、10 新金山、11 東三省、12 黑龍江、13 十八省、14 鳳凰城、15 安東縣、16 大東溝、17 旅順口、18 法庫門、19 哈爾賓、20 寧古塔、21 龍井村、22 局子街、23 頭道溝、24 百草溝、25 齊齊哈爾、26 滿洲里、27 綏芳河、28 秦皇島、29 張家口、30 周村鎮、31 嘉峪關、32 三都澳、3 喀什噶爾、34 恰克圖、35 科布多、36 鴨綠江、37 大陵河、38 楊子江、39 錢塘江、40 洞庭湖、41 高郵湖、42 丹陽湖、43 寶應湖、44 鄱陽湖、45 昆明湖、46 萬壽山、47 護城河、48 大衛衛兒、49 小衛衛兒、50 死衛衛兒、51 一道橋、52 三岔路、53 石頭道

丁第四字重念

1 烏魯木齊

戊第五字重念

1 塔爾巴爾台、2 烏里雅蘇台

先行の『華語跬步』未定稿版から中国国内の地名が大量に追加されたが、何より大きな変化は、海外の国名、地名が加わったこと、中国国内では東北部、蒙古、西域の地名が加わったことである。この間に海外との関わりが増したこと、日本の中国における活動域が広まったことが理由として挙げられるだろう。また、『教科書』の名詞集で特筆すべき特徴は、『東亜同文書院同窓』5号（1910年）の広告が「附録トシテ各名詞ヲ其ノ重念ノ守位ニ依リテ區別編集シ研究利便多カラシムル等斯界ノ書中ニ於テ獲ガタキ大特徴ヲ有ス」と宣伝し、凡例の第7項で「重念ノ字位ニ依リテ區別編纂セリ」と述べ、上記一覧でも明らかのように、中国語らしい語感を重視し、語彙のアクセントに焦点を当てた練習を意図していることである。

但し、6年後に出版された『華語萃編』はこの「重念」に基づく配列を継承せず、意味分類毎の配列に戻し、収録語彙は『教科書』からさらに大幅に増加した（アミカケ部分は『教科書』から継承した語彙で、□は字体か音訳が一部変わったもの、「_」は一旦『教科書』で削除さ

れたが復活したもの、一覧中の「|」は原書で分類の境界の空白行であることを示す)。

華語萃編

地球、世界、五大洲、亞細亞(亞洲)、歐羅巴(歐洲、西洋)、阿美利加(美洲)、阿非利加(非洲、阿非洲)、澳大利亞(新金山)、中國(中華民國)、日本(東洋)、高麗(朝鮮)、印度、緬甸、安南(越南、日南)、暹羅、波斯、英國(英吉利)、法國(法蘭西)、德國(德意志、日耳曼)、普魯士、俄國(俄羅斯)、奧國(奧地利亞)、義國(意國、伊太利)、日國(日斯巴尼亞、西班牙、大呂宋)、葡國(葡萄牙、大西洋國)、丹國(丹麥、丹抹兒、噠國)、瑞典(瑞國)、瑙威(瑙國、那國)、比國(比利時、白耳義)、荷國(荷蘭、和國)、瑞西、土國(土耳其)、希臘、阿剌伯、摩洛哥、埃及、美國(美利堅、花旗國、合眾國)、墨西哥、尼加拉瓜、秘國(秘魯)、巴西(巴國)、布哇、斐律賓(呂宋)、瓜哇、馬來島、新嘉坡、西貢、河內、舊金山(三藩)、海參威、小呂宋、檀香山|省分、直隸(燕)、山東(齊、山左)、山西(晉、山右)、陝西(秦)、甘肅(隴)、新疆(新)、四川(蜀)、湖北(鄂)、湖南(湘)、河南(豫、汴)、安徽(皖)、江西(贛)、江蘇(吳)、浙江(越)、福建(閩)、廣東(粵)、廣西(桂)、雲南(滇)、貴州(黔)、東三省、盛京、吉林、黑龍江、外藩、滿洲、蒙古、西藏、伊犁、青海|京都、省城、北京(順天、燕京、幽燕、金台)、保定(保陽)、濟南(濟陽)、太原、西安(西京)、蘭州、成都、武昌、長沙、開封(汴梁、東京)、安慶、南昌(洪都、洪江)、南京(江寧、金陵)、杭州(武林、虎林)、福州(三山)、廣州(五羊城、穗垣)、桂林(象都)、雲南(滇池)、貴陽(貴州)、奉天(瀋陽)、吉林(船廠)、齊齊哈爾|商埠(通商口岸)、天津(天津衛)、大沽、秦皇島、張家口(東口)、多倫諾爾(喇嘛廟)、赤峯(哈達)、歸化城(西口)、鄭州、芝罘(煙台)、威海衛、青嶋(膠州)、濟南、周村鎮、濰縣、龍口、上海(滬、申江)、吳淞、海州、鎮江(京口、京江)、蘇州(平江)、南京、蕪湖、安慶、九江(潯陽)、漢口(漢皋)、沙市、宜昌、岳州、長沙、湘潭、常德、萬縣、重慶(渝)、杭州、寧波(甬、四明)、溫州(甌)、福州(閩)、廈門、三都澳、廣東、汕頭、九龍、拱北、江門、三水、公益、甘竹、惠州、北海、海口、瓊州、香洲、香港、廣州灣、梧州、桂林、南寧、龍州、雲南、蒙自、河口、思茅、騰越、大連(青泥窪)、旅順口、牛莊(營口)、連山灣、遼陽、奉天、鐵嶺(銀州)、新民府(新民屯)、法庫門、通江子(通江口)、洮南、安東縣、大東溝、鳳凰城、吉林、龍井村、局子街、頭道溝、百草溝、甯古塔、琿春、三姓、長春(寬城子)、哈爾濱、齊齊哈爾(卜魁)、愛琿、海拉爾、滿洲里、恰克圖(買賣城)、烏里雅蘇台、科布多、嘉峪關、伊犁、塔爾巴哈台、喀什噶爾、烏魯木齊(迪化府)、吐魯番、古城、哈密、拱薩、亞東、江孜、噶爾渡|山、火山、山峯兒、山頂兒(山尖兒)、山嶺兒、山坡子、山窪子、山洞、山澗、山根兒(山脚)、土坡子、高坡子、陡坡子、五嶽、泰山、華山、衡山、恒山、嵩山、太行山、長白山、天山、興安嶺、峨眉山、廬山|河、江、河源(水

源)、河岔子、河溝子、河岸(河沿兒)、水坑、水溝、瀑布、溫泉、井、自來水、漩窩、黃河、永定河、遼河、灤河、白河、運河、護城河、揚子江(長江、大江)、錢塘江、閩江、珠江、鴨綠江、黑龍江、湖、池(池子)、洞庭湖、丹陽湖、鄱陽湖、太湖、高郵湖、洪澤湖、寶應湖、巢湖、西湖、昆明湖(昆明池)、大洋、海、海面、水面、潮、波浪、海嘯、灘(沙灘、河灘、海灘)、海岸、海島、太平洋(東海)、印度洋、大西洋、黃海(黑水洋)、渤海、南海 | 道路(道兒)、大道(大路)、小道兒、馬路、石頭道、岔道、三岔路、十字路、拐灣兒、旱路、水路、大街、衚衕兒(小巷)、馬頭、口岸、租界、鎮店、鄉下、村莊、小村兒、橋、擺渡、堤、壩、水閘、牌樓、牌坊、樹林子(竹林子)、墳地、莊稼地、水田、旱田、山地、高地、窪地、田園、菜園子、花園子、公園、野地、草地、沙漠、鐵礦、煤礦(煤窰)、東清鐵路、吉長鐵路、安奉鐵路、南滿鐵路、京奉鐵路、京張鐵路、京漢鐵路、粵漢鐵路、川漢鐵路、津浦鐵路、膠濟鐵路、滬寧鐵路、滬杭鐵路(蘇省鐵路)、杭寧鐵路、滇越鐵路、汴洛鐵路、洛潼鐵路、正太鐵路、山海關、居庸關、潼關、函谷關、雁門關

『教科書』から『華語萃編』へ大幅に語彙が追加されたが、とくに大きな変化は、国内の地名別称と、交通インフラとしての鉄道路線名が追加されたことである。

『教科書』附録の名詞集は、先行教科書『華語跬歩』の名詞集に該当する部分、後続の『華語萃編』と共通点があり、掲出語彙も『華語跬歩』を基に加筆され、さらに『華語萃編』は『教科書』を基に加筆されている。「名詞集」に限って言えば、『華語跬歩』から『教科書』、『華語萃編』へ先行する教科書を基礎として発展させた継承関係が明確に見てとれる。

4 新旧概念が混在する時間表現

『北京官話教科書』は二十世紀初頭(1910年)の出版であるが、前世紀の中国では西洋式時計の普及により、伝統と西洋式の異なる時間概念が混在することになった。本書の成立時期は概ね西洋式の表現が定着した時期にあたるが、本書の本文で時間はどのように表現されたのか、本節で概観する。各用例冒頭の数字は「編-課-番号(文章体「談論」の場合は筆者が読点毎に付した番号)」、囲みは該当語句を示す(以下同)。

4.1 時点の表現

時点について、古い時代、近々の日にち、時間帯を問う際には“多嚙(多咱)”を用い、時計で示されるような具体的な時点は“甚麼時候兒(什麼時候兒)”と“幾點(幾點鐘)”を用いる。日付・半日単位は“幾兒”で問われる。具体的な時刻は“下兒鐘”と“點鐘”で表現する。曜日は“星期”ではなく“禮拜”で表す。

- 1) 3-27-6…閣下天天兒[什麼時候兒]用功 3-27-7 小弟天天兒是從[辰初]到[巳初]
- 2) 2-39-1,2 1 兄台久違了您是[多嚕]回來的 2 我是[前天晚上]到的家老弟一向好啊
- 3) 2-3-18,19,20 18 您想大概得[甚麼時候兒]回來 19 巧了他[三點鐘]也就回來了 20 那麼我[三下兒多鐘]再來盪罷
- 4) 2-9-3,4,5 3 桌子上頭の鐘站住了不知道有[幾點鐘]了 4 你月摸著有[幾點鐘]了 5 我約摸著現在總有[八點多]了
- 5) 1-14-17,18,19,20 17 打了[八下兒鐘]我要上堂 18 你天天兒[幾點鐘]下堂啊 19 現在[幾點鐘]了 20 纔交了[十點鐘]了
- 6) 2-27-9 我先叫你一回纔[十點鐘]的時候兒現在[晌午歪]了你竟洗澡去用這麼大工夫麼

4.2 時量の表現

『教科書』では、年数や日数の用例はあるが(2-1-17,18 17…可是您學敝國話有[幾年]了 18 纔[半年]的工夫兒說不上來的話還多着呢、2-29-21,22 21 你得[多咱]可以得 22 [十天]可以做得了、3-11-5,6 5…大概得[幾天]到京呢 6 這可不敢說若是遇見風雨[七天八天]都不定按規矩平風靜浪的是[四天]到通州)、時計の目盛りで表すような「時間、分」の時量を表す用例は見られない。

5 会話本文の語彙的特徴について

『教科書』は凡例第2項で、1910年出版当時の中国は、十数年来の新学の勃興、時代の変化によって新語が大きく増加し、主として語彙の面で、従来からの中国語と新しい中国語が併立するような状況にあり、外国人が外国語としての中国語を学習する際には新旧両様を理解する必要があったと述べている。そこで、『教科書』では従来からの語彙が中国語の根底をなすものと位置づけ、「本書ニ於テハ從來ノ語言中雅ニ失セス俗ニ蹈ラス、各界ニ通用スル語言ヲ基礎トシテ」(凡例第2項)扱うことを明記している。では、『教科書』に記述された「北京官話」とはどのような特徴を持つものであったのか、まず5.1で太田(1969)が示す北京語の特徴に基づき、本書の語彙の特徴を概観し、5.2以下は太田(1964)、日下(1974)が示す南北差の特徴に基づいて概観する。

(1) 太田(1969)の北京語の語法特点に合致する特徴について

太田(1969)が示す7項目のうち「形容詞に“～多了”が後置される」を除く、6項目の特徴と合致する。“～多了”が無いことについては、別表現を含めて同義の表現を用いる場面が無

いことによるものであろう。

① 一人称代詞の包括形と除外形“咱們”と“我們”を区別する

一人称複数の絶対多数は“我們”であるが、“1-31-17 上回[咱們]商量的那件事怎広定規了”のように、包括形を明確に意識した用例が見られる。

② 介詞“給”を用いる

介詞“給”は“1-8-16 把這個東西[給]他送去”等、極めて多く使われている。

③ 助詞“來着”を用いる

“1-8-6 我看書[來着]”等、過去の追憶を表す“來着”の用例がある。『華語萃編』にもこの例に類似した“1-3-14 念書[來着]”がある。

④ 助詞“哩”を用いず、“呢”を用いる

文末助詞“呢”を多用する一方で“哩”の用例は無く、北京語の特徴に合致する。

⑤ 禁止の副詞は“別”を用いる

“2-14-4 [別]竟你一個人說也得讓他說呀”等、禁止には基本的に“別”が用いられる。

⑥ 状語の程度副詞は“很”を用いる

“1-40-21 別的地方兒都[很]好可惜有這點兒毛病”等、“很”が極めて多用されている。

(2) 人称代詞と関連表現

① 一人称

複数については前述の通りで、単数は基本的に“我”である。のちの『華語萃編』と同様に、本書では“俺”や“咱(喀、偌)”が無いのは、「北京官話教科書として編纂」(初集凡例の第一項)され、基本的に下層社会や農民の話者が登場せず、会話が概ね特定階層の話者のみであることによる。自称は、北京語の“自各兒”が“3-6-19 今年正月裡我[自各兒]放鞭炮”等の用例があるが、南京官話で使われる“自己”は用例が確認できない。

② 二人称

二人称はほぼ“你”、“你們”、敬称の“您”である。“您納”は“2-29-4 我見老爺手底下有事所以沒敢回稟[您納]”、“2-49-9 您這是幹什麼破費[您納]”、“3-15-7 怎麼[您納]鬍子都有白的咯”、“3-19-1 前天給您請安來遇見[您納]公出”の例があるが、少数ゆえ、特に傾向は見出せない。なお、後続教科書の『華語萃編』では“您納”が25例に増え、主に中流以下の階層の人物が相手に敬意を表す場面で用いられている。下層で使われる“你老”の用例は無い。

③ 三人称

三人称は“他”と複数“他們”を用いる。敬称“他納”や“您”の用例は無い。

(3) 接尾辞「兒」と「子」

接尾辞“兒”については、“花兒、帽兒、碟兒、信兒、書本兒、字兒”等のモノを表す名詞に付くほか、“天天兒、好好兒、細細兒、暗暗兒、漸漸兒、整整齊齊兒”等のかさね型、さらに“時候兒”、“地方兒”、“(一) 點兒”、“一塊兒”、“今兒、今兒個、昨兒、昨兒個、明兒、大後兒”(“今天、昨天、明天、大後天”も少数ある)等の日にちを表す語、場所を表す“這兒”、“那兒”等で極めて多く用いられている。“子”は“兒”と比べると、用例数が極めて少ない。

(4) 代詞“甚麼”が“甚麼的”で列挙を表すもの

列挙を表す際に、“1-13-6 賈現在有各樣兒的菓子和魚肉^{甚麼的}”や“2-47-5,6 5 他們在京城裏都是做甚麼買賣呢 6 飯莊子大小飯館子茶館兒大貨鋪又叫豆腐樓還有米碓房糧食店猪店湯鍋油坊^{什麼的}到了那西五府的人在京城裏頂大的是祥字號兒賣的是綢緞洋貨布疋^{甚麼的}”や“3-14-14還有香山和四平臺^{什麼的}”、“3-14-14還有香山和四平臺^{什麼的}”のように事物を問う代詞“甚麼”による“甚麼的”を名詞に後置する北京語の用法がある。

(5) 指示代詞“這麼、那麼、怎麼、多麼”と“着(著)、様、様兒、個”

“這麼”54例、“那麼”66例で、“那麼”の46例は連詞の用例で、“那麼”に起点・経由・行き先を表す介詞を前置する“1-16-23 你若往^{那麼}去路很遠”等の用例が複数見られる。“這麼着(著)”、“那麼着(著)”で「このように、あのように」を表すもの(1-39-23 ^{這麼着}也不好^{那麼着}也不好)、量詞“個”を伴う“這|那麼個”、“様”が付く“這|那麼様(兒)”、さらに“這|那麼個様(兒)”の用例もある。疑問・感嘆の“多麼”も“1-11-20 你說的那個東西是^{多麼}大的”等の用例がある。

(6) 数量(金額)を尋ねる表現“多少錢”と“多兒錢”

金額を尋ねる場合、“多少錢”は“2-35-25,26 25 ^{多少錢}一嗎 26 兩塊三角”等、同義のアル化“多兒錢”は“1-10-6,7 6 你^{多兒錢}買來的 7 是兩塊錢買來的”等、いずれの用例もある。数量の表現では、少量を表す“點兒(一點兒)”と“些個”の用例も極めて多い。

(7) 時間・費用がかかることを表す動詞

時間・費用のコストは北方語の“得”で表し(3-11-5…大概^得幾天到京呢)、南京官話の“要”は用いない。

(8) 「よく～する」を表す動詞

北方語で「よく～する」意を表す動詞“愛”に“3-6-1 中國的風俗過年都^愛放鞭炮…”、“3-14-7 人常常的^愛生病”等の用例が多数ある。

(9) 不可能を表す「～不了」

可能補語の“不了”は“1-28-14 一點兒半點兒的^{算不了}毛病”、“1-40-16 他的那個壞皮氣怕是一輩子也^{改不了}”、“3-5-8…後來我這^{免不了}有請教的事情的…”等の用例がある。

(10) 実現・完了を否定する“沒”と“沒有”

動作・行為の実現・完了を否定する際は、“1-5-17 我^沒看見”等のように“沒”を用い、“沒有”は用いない。“沒有”は存在しないことを表す動詞に限られる。

(11) 程度を表す“得慌”

南京官話には無い“得慌”の用例“2-6-17 一天不吃飯餓^{的慌}”があるが極めて少ない。一方、南京官話で普通に用いられる“得很”は“1-32-15 現在的行價貴^{得很}實在不好買”など多数の用例がある。この点に関しては北方語の特徴が濃いとは言い難い。

(12) 「あたえる」“給”の“V給”

“給”の用例は極めて多く、受益者を表す介詞(1-8-16 把這個東西^給他送去)、単独の動詞“給”のほか、“V給”(1-8-10 ^交給你這個東西)が多用されている。

(13) 使役と受身の“叫(叫)”

使役を表す“叫(叫)”の用例は多く、“1-28-21 那件事實在^叫您受累謝謝”、“2-5-17…這是我們李掌櫃的^叫我送來的”等の用例がある。受身の用例は見られない。

(14) 反復疑問と目的語の位置

本書では“3-17-3 我是要用銀子不知道這個銀子匯到北京去^有什麼傷耗^{沒有}”等、北方語の反復疑問で目的語を肯定・否定の中間に置く例が複数見られる。

(15) 介詞

① 起点を表す介詞

北方語の“解”“打”が“3-31-1.2,3 1 你這是[解]陝西回來ㄙ 2 不是我是[打]安徽回來 3 你當初不是上陝西去了ㄙ怎ㄙ如今是[解]安徽回來呢”等、同じく北方語の“起”も“1-12-12 [起]日本到上海幾天可以到呢”等があり“打”は“1-15-17[打]上海到長崎有多少里路”等の用例がある。一方で、南京官話で用いる“從”は“3-37-1 老弟是[從]那兒來”、“由”は“1-32-25 這是[由]我們敝處帶來的”等の少数の用例が散見されるが、総じて北方語の介詞が多用されている。

② 行き先を表す“上”と“往”

行き先を表す際の北の特徴である“上”は“2-2-9 你昨天[上]那麼去是坐車去的呀還是步行兒去的呢”等の用例が比較的多くある。一方、南で多用される“往”も少ないながら“3-19-4 …又不知道您[往]那麼去咯咭大遠的[往]這麼來空回去”等の用例がある。行き先は“那麼、這麼”である。“到”は前項に挙げた“1-12-12 起日本[到]上海”、“1-15-17 打上海[到]長崎”等がある。

③ “給”、“跟”と“替”、“和”

介詞“給”は多用され“2-3-15 你把信簿子給我我[給]你畫上罷”等の用例があり、“替”や“和”も複数の用例(2-39-8 我原本打算老弟府上辦喜事之前可以趕回來[替]老弟張羅張羅、1-31-16 我有一件事要[和]你商量)があり、南北いずれかの特徴が明確であるとは言えない。南ではあまり用いられない“跟”が“3-1-6 我[跟]您一塊兒去買那倒不要緊”等、“同”は“3-1-5 您若認識的舖子[同]我一塊兒去買或者許便宜點兒”等の用例がある。

④ 依拠を表す介詞

介詞“按”の用例は無いが、動詞“按”が助詞“著(着)”を伴う“3-7-4 你打算是[按着]月打麼”、“3-29-6 我打算要[按著]外國的式樣蓋”等が見られる。

(16) 副詞

① “挺”、“頂”と“很”

本書では“很”が極めて多く用いられている。一方で、“挺”と“頂”に関しては、太田(1964)は「“挺”が北方語、“頂”は南で用いられた」とし、陳(2016)98頁、陳(2018)91頁は、副詞“挺”の初出を1830年代の《正音撮要》とし、明治・大正の中国教科書_マでの用例は少ないとするが、本書では北の特徴とされる“挺”に用例が無く、“頂”は“3-24-8 風暴就是三九這兩個月[頂]利害”等の用例が散見される。本書は北京官話の教科書を標榜するが、こ

の項目については南の要素が強いと言える。

② “老”と“總”

時間が長いことを表す北の“老”、南北共通の“總”が一つの台詞で併用される用例(2-10-1 従前我也勸過他一回當官差或是做買賣[總]得要認真幹別懶怠可是到現在[老]不改他那脾氣所以人家都不肯用他了)がある。

③ “乍”と“將就”

北方語の“乍”が「これからすぐ」の意を表す用例(3-26-5,6 因為你的鋪子[乍]開遠處的人未必知道)と連用して、「突然、急に」の意を表す用例“1-37-23 上海現在的天氣沒準兒[乍]冷[乍]熱的”がある。一方で、長江流域で使われるところがあるという“將就”は用例が無い。

④ その他の副詞

北方語で「しきりに、とめどもなく」を表す“直”に用例(2-15-9 凍的[直]打顛兒)がある。同じく北京語で「すっかり、ぜんぜん」の意を表す“所”には“2-19-13…我在家的時候兒常愛閒逛就打去年到了這兒[所]沒上那兒進去…”の用例がある。

(17) 北方語の特徴的な助詞“似的”、“得了”

類似を表す“似的”は“2-25-2 你快給我打洗臉水來今天颳的風很大颳了滿身的土彷彿泥猴兒[似的]…”等がある。一方、南京官話の“和～一樣”も“2-36-7 打頭兒是[和]起頭兒[一樣]”等の用例がある。文末に用いて「～すればそれでよい」意を表す“得了”が“2-7-8 還是用見天吃飯的那張桌子上頭蓋上圓桌面兒就得了、2-25-26 不要回信你快送了去快回來就[得了]”等があるが、これに相当する南京官話の用例は見られない。

(18) その他の特徴

① 状態の完成への接近を表す“上來”

方向補語“上來”で状態の完成への接近を表すのは南京官話には無い用法であるが、本書では、“2-16-8 快黑[上來]了”や、動詞“說”を補い、「考えを口に出して表現する」動作が滞りなくできることを表す用例(2-1-18 纔半年的工夫兒說不[上來]的話還多着呢)がある。

② 動詞“讓”

北方語ではよく用いとされる動詞“讓”であるが、本書ではほとんど見られず、“2-14-4 別竟你一個人說也得[讓]他說呀”の1例である。使役の意味では前述の“叫”を多用する。

6 会話で使用される成語・多字句の定型表現

同じく東亜同文書院による教科書で、書院生の旅行・調査の実用教材である『北京官話旅行用語』では、硬軟様々31種の四字句が使われているのとは対照的に、本書は成語については極少数の用例があるのみである（3-1-6 貨真價實、3-1-6 童叟無欺、3-6-24 有損無益、3-6-24 有志者事竟成）。一方で、『華語萃編』と同様、成語よりも難易度が低いと言える俗語（2-32-5 二月開雷八月收雷、2-36-3 鐵打房梁磨繡針工夫用到自然成、2-40-5 千里送鵝毛、2-41-10 善惡到頭總有報只爭來早和來遲、3-6-24 耽遲不耽誤、3-26-25 頭醋不酸徹底薄、3-30-1 天下無難事只怕有心人）等の定型表現が複数見られる。

7 さいごに

1910年に出版された『北京官話教科書』は、同書の後続テキストである1916年初版の『華語萃編』初集と、具体各章のタイトルや内容には明らかな継承関係は見られないものの、全体の目次構成が概ね一致している。また、附録の名詞集は、先行教科書の『華語跬歩』を『北京官話教科書』が項目数、語彙数ともに充実させ、『華語萃編』がそれをさらに充実させたプロセスが見られる。本文の言語は、官話共通の表現をベースに、北京官話、北京語、北方語といった所謂「北」の特徴で括られる特定の語彙を多用する傾向が顕著である。新旧の時間表現のように、時代の変化に応じて新旧表現を併用したり、また、成語等の上級向けの定型表現を極力提示しない傾向も見られる。主人と使用人、または場面設定上、若干の異階層との応酬を含むが、基本的には都市在住の中流階層以上の（凡例に言うところの）「北京官話」による生活に必要な会話の応酬を示したテキストであり、そのコンセプトは後続の『華語萃編』に発展的に継承されていることが明らかになった。一方で、課文の典拠や『華語跬歩』、『華語萃編』との表現の差異等については今後更に詳細な分析が必要である。

【参考文献】

- 太田辰夫（1964）「北京語の文法特点」『久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念中国研究』（再掲：太田辰夫（1995）『中国語文論集 語学・元雜劇編』汲古書院）
- 太田辰夫（1969）「近代漢語」中国語学研究会『中国語学新辞典』光生館
- 日下恒夫（1974）「清代南京官話方言の一斑——泊園文庫藏《官話指南》の書き入れ——」『関西大学中国文学会紀要』第5号
- 陳曉（2016）「清朝後期の副詞「挺」について」『中国語研究』第58号 白帝社
- 陳曉（2018）「『北京官話全編』の副詞」『北京官話全編の研究——下巻』関西大学出版部
- 石田卓生（2019）『東亜同文書院の教育に関する多面的研究』不二出版

